

“秋” に聴きたい名曲を集めて

プログラム

季節は秋です。朝晩は寒くなりますが、日中は空気が済んでいて清々しく、心地良い気分になります。また物思いにふけったりセンチメンタルな気分になるのも秋、そして活力が湧いてくる季節でもあります。今日はそんな秋に聴きたくなる名曲を集めてみました。

以前「秋の似合う作曲家ブラームス」というテーマを組んだ事がありました。今日はブラームスの室内楽の名作クラリネット五重奏曲をドイツの名女流クラリネット奏者**ザビーネ・マイヤー**（1959～ ）と名カルテット**アルバン・ベルク**弦楽四重奏団の演奏でお聴きください。名クラリネット奏者ミュールフェルトとの親交から生まれた晩年の一連のクラリネット作品を代表する傑作です。ロシアの大家ラフマニノフは詩情豊かな美しい旋律を数多く残しています。4曲あるピアノ協奏曲は第3番と第2番が有名ですが、特に第2番は甘いロマンの香りが濃厚で、美しい詩情に溢れた名曲です。ブルガリア出身の名ピアニスト**アレクシス・ワイセンベルク**（1929～ 2012）と巨匠**ヘルベルト・フォン・カラヤン**（1908～ 1989）共演による名演奏でどうぞ。ファリャやアルベニスと並んでスペインを代表する作曲家グラナドスは、優れたピアニストでもありましたが、12のスペイン舞曲は彼の代表作のひとつです。第2曲のオリエンタルは郷愁を誘うメロディで良く知られていますが、今日はカナダの女流チェリスト**オーフラ・ハーノイ**（1965～ ）によるチェロ編曲版でお聴きください。メンデルスゾーンの5曲ある交響曲のうち第3番「スコットランド」は実祭には最後の交響曲ですが、美しく清らかな旋律、優雅さと快活な躍動感など、この季節に聴くには最適の名曲です。イギリスの名匠**コリン・テイヴィス**（1927～ 2013）の指揮でお楽しみ下さい。（中川）

ヨハネス・ブラームス(1833～1897):

クラリネット五重奏曲 短調 Op.115 ～ 第1楽章、第4楽章

ザビーネ・マイヤー(クラリネット)

アルバン・ベルク弦楽四重奏団

(1998.3.2 サルツブルク、モーツァルトサールでのLive)

セルгей・ラフマニノフ(1873～1937):

ピアノ協奏曲第2番 短調 Op.18

アレクシス・ワイセンベルク(ピアノ)

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

(1972.9.26 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

*** 休憩 ***

エンリケ・グラナドス(1867～1916):

オリエンタル -12のスペイン舞曲 第2曲-

オーフラ・ハーノイ(チェロ)/マイケル・デュセク(ピアノ)

(1996.8.13 カサルスホールでのLive)

フェリックス・メンデルスゾーン(1809～1847):

交響曲第3番 短調 Op.56 “スコットランド”

コリン・テイヴィス指揮バイエルン放送交響楽団

(1995.1.20 ミュンヘン、ヘルクレスサールでのLive)

曲 目 解 説

ブラームス：クラリネット五重奏曲口短調作品115

ハンブルク生まれの大作作曲家ブラームスは、シューマンに紹介され才能を開花、次々と名曲を生んで行きますが、1890年57歳の頃には押しも押されぬ大家として認められ、生活も安定していました。同時に精力的な創作力が後退して来たことも感じはじめていました。ブラームスは1891年マイニンゲンを訪れ、マイニンゲンの管 楽団の名クラリネット奏者ミュールフェルトの演奏を聴いて心を打たれ、彼のためにクラリネットの作品を書こうと再び創作意欲を掻き立てられます。そして完成したのが4曲のクラリネット作品です。1891年の夏にクラリネット三重奏曲、その後すぐにクラリネット五重奏曲を2週間程で書き上げ、1894年に2曲のクラリネット・ソナタを完成させました。特に**クラリネット五重奏曲**はクラリネットの音色と技巧を生かした奥深い響きが多彩に展開され、晩年の円熟した書法によってブラームスの室内楽を代表する傑作として知られています。1891年12月12日にベルリンでミュールフェルトのクラリネットとヨアヒム四重奏団によって初演されました。

第1楽章 アレグロ 第2楽章 アダージョ 第3楽章 アンダンティーノ 第4楽章 コン・モート

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番ハ短調作品18

ロシア生まれで後にアメリカに渡ったラフマニノフはピアニストとして出発し名を成す一方、作曲家としてはチャイコフスキーの影響を強く受け、最大の後継者として様々な分野で作品を残しました。1895年22歳の時に完成した交響曲第1番の初演が記録的な大失敗に終わり、神経衰弱と自信喪失から作曲が出来ない状態に陥った時、これを救ったのが精神科医のダール博士で、治療によって創作意欲を回復したラフマニノフは、1901年に**ピアノ協奏曲第2番**を完成させました。初演は1901年10月27日モスクワでラフマニノフ自身のピアノで行われ、大成功を収めると、これが名誉あるグリンカ賞を受賞し、この作品で作曲家としての名声を確立しました。出世作となったピアノ協奏曲第2番は近代的なピアノ技法の粋を集めた演奏効果を駆使して、全曲を覆う詩的情緒に満ちたロマンティズム、激情するダイナミックなスケール感など、すべてが最良の形で結集された作品で、ラフマニノフの代表作というだけでなく、古今のピアノ協奏曲の最高傑作として認められ、今日最も演奏頻度の高い人気曲になっています。

第1楽章 モデラート 第2楽章 アダージョ・ソステヌート 第3楽章 アレグロ・スケルツァンド

グラナドス：オリエンタル -12のスペイン舞曲 第2曲-

スペインのカタルーニャ地方レリダで生まれたグラナドスは、軍人の父を持ち、音楽好きの一家で幼年期から楽才を示し、10歳の時にパリでピアノと作曲を学び、22歳の頃には優れたピアニストとして演奏会を開くまでになりました。作曲家としては1911年に完成したピアノ組曲「ゴイエスカス」が有名ですが、1916年、これを基に画家ゴヤの絵による物語に編曲して完成させた歌劇「ゴイエスカス」もよく知られています。これらに先立ち1893年26歳の時に作曲、グラナドスの出世作となったのが**12のスペイン舞曲**です。12曲それぞれの標題は作曲者が付けたものではなく、出版社によるものです。スペイン民謡風の民族色の強い曲、ジプシー風の曲、素朴で感傷的な曲など多彩ですが、第5曲の「アンダルーサ」と第2曲の「**オリエンタル**」は特に有名で、ヴァイオリンやチェロ、ギター等に編曲されて親しまれています。オリエンタルは郷愁を感じさせるせつない曲想が美しく、一度聴いたら忘れられない魅力を持っています。今日の演奏はチェロ編曲版によるものです。

メンデルスゾーン：交響曲第3番イ短調作品56 “スコットランド”

ブラームスと同じドイツのハンブルクで銀行家の息子として生まれたメンデルスゾーンは、裕福な家庭で教養を身に付け、その早熟な音楽的天才ぶりは、モーツァルトにもひけを取らないと言われ、38年という短い生涯の中で数々の名曲を残しました。5曲の交響曲もそれぞれの魅力を持った名作ばかりですが、**第3番「スコットランド」**と第4番「イタリア」が特に親しまれています。メンデルスゾーンは、1829年自作の交響曲を指揮するために訪れたロンドンからスコットランド地方を旅行し、ホリルード城という歴史に包まれた古城に強い感銘を受け、冒頭部分の靈感を得たのでした。しかし、着手はしたものの、その後中断、完成したのは1842年のことでした。初演は1842年3月3日、ライプツィヒのゲヴァントハウスでの演奏会でメンデルスゾーンの指揮で行われました。従って作曲年では、最後の交響曲ということになります。やや暗いロマンティックな叙情性、瞑想的な深い哀感、そして快活な力感を持った傑作で、ロマン派屈指の交響曲に数えられています。

第1楽章 アンダンテ・コン・モート 第2楽章 ヴィヴァーチェ・ノン・トロツポ
第3楽章 アダージョ 第4楽章 アレグロ・ヴィヴァチッシモ